

なおい彷徨

——日本語雑記・二——

ディックとの遭遇

SFという分野にわたしが特に関心を寄せることはなかった。が、たまたま米国人作家フィリップ・K・ディックの『永久戦争』を新潮文庫の浅倉久志訳で読んで参ってしまった。特にそのうちの「傍観者」(原題『THE CROMIUM FENCE』)がある。

通勤に円盤を利用する時代、ある連邦では国を二分する争いが起こっていた。自然な生活をよしとする自然党と、極端な清潔をたつとぶ清潔党との対立である。議会で清潔党が主導権を握ったので、五項目の清潔党綱領案が成立したら、口臭の規制、歯の漂白、頭髮の復元などが強制され

る。そこで対立が激化し、家庭不和、住宅の焼き討ち、反対派の殺害などが頻発した。

これが発表されたのは日本の昭和三十年。わたしが翻訳を読んだのはその廿年後である。そのころわたしの研究室を訪れる一女子学生の髪がいつも濡れたような感じであった。ある日その理由を尋ねると、髪が多いので登校前に必ず洗髪するのだ、と羨ましい答えが返って来た。ディックの空想した世界がいささか現実味を帯びて日本にも出現していたのである。高校の女子生徒を中心に広がった朝の洗髪習慣である。「朝シャン」の新語を生み、簡便な洗髪装置や器具も発売された。清潔癖は各種の「抗菌」商品の流

工藤力男

行を招き、公には悪臭防止法の改訂、臭気判定士の誕生と続いた。今は皮肉にも新型インフルエンザに備えた消毒とマスクの氾濫である。

三橋修 『作家は何を嗅いできたか*』において、あるいは感性の歴史*（現代書館 2009）は多くの点でわたしの関心と重なる。「まえがき」で、今の子供たちのいじめには「死ぬ」と「くさい」という言葉がはびこっていると言い、最終章「においてを排除する今」で、現在の病的な清潔癖を批判する。この風潮の社会的かつ重厚な考察は三橋さんに譲り、本稿では、語としての「において」の意味の変遷と表記の歴史をめぐる思索の跡を記そうと思う。

紀年は元号により、併せてキリスト暦による年次を括弧内に横書きすることがある。萬葉集の歌の下に括弧書きした数字は、『国歌大観』の番号である。

いろはにほへと

「にほふ」という語について、高等学校で学んだほどの日本人ならすぐに思いうかべるに違いない三つの古い歌がある。

一つめは「いろは歌」。

いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむう
ゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす
涅槃経ねはんきょうにある四句の偈げ「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為楽」の意味を日本語で表現したものだ、とする説が平安時代に唱えられて大方の支持を得ている。これは左記のように漢字仮名まじりで書くことができる。

色はにほへど、散りぬるを、我が世たれぞ、常ならむ、
有為の奥山、今日越えて、浅き夢見じ、酔ひもせず。

「諸行」にあたる「色」は音がシキ、仏教語「有形の存在すべて」の意と解してよいだろう。「無常」は「にほへど散りぬるを」にあたり、栄えてもやがて滅びゆく意となるうか。いづれにせよ、この「にほひ」は嗅覚にじかに関わることはないようだ。

二つめは小倉百人一首の伊勢大輔いせのたいふの歌である。

いにしへの奈良の都の八重桜やえざくらけふ九重ここのへにほひぬるかな

結句の「にほひぬる」はおおよそ「美しく咲き誇っている」と訳される。現代人にはいささか違和感があるが、八重桜の香りが特に詠まれることは考えにくいので、「にほふ」は「咲き誇る」といった意味だろうと思う。

三つめは萬葉集、小野朝臣老が九州大宰府でよんだ歌。

あをによし奈良の都は咲く花のにはふがごとく今さかりなり (328)

天平二年ころ大宰府に着いた小野老を歓迎する宴の席での詠と推測されている。第四句「にほふがごとく」を、伊藤博『萬葉集釋注』では「色香が匂い映えるように」と訳している。つまり、花の「色」と「香」が、「匂い」かつ「映える」というのである。これは現代の一般的な解釈である。なぜこうなるのか。

古写本でもこの訓で安定している第四句の原文は「薰如」である。伊藤さんは「にほふ」に「色香が照り映える」と注記したうえで、「ただし、原文「薰」によれば、ここは嗅覚の芳香もこめていられるらしい。」と書いている。「映える」に重きをおきながら、「匂う」も加味した表現なのだという。奈良時代の「にほふ」は視覚美の表現が主であるが、嗅覚による把握も生じていた、と理解しているのである。

右には三首の歌について順次に時間をさかのぼった。ここに端的に現われた日本語の「におい」と「かおり」の関係は、日本語史や古代和歌を学んだ者にとつては常識であ

る。だが、去りし春ある研究会に出たとき、このことを必ずしも十分に理解せずに教壇に立つ人があることを知ったことは古代語や和歌の表現に限られるわけではない。いま毎日の言語生活で、特に「におい」の表記の厄介な問題は誰もが経験していることである。かかる事態に至った原因と経過について整理しておくことは無意味であるまい。

「丹穂ふ」から「薰ふ」へ

萬葉集には、動詞「にほふ」・名詞「にほひ」と解釈できる用例が七十ほどある。表意文字と推測されるのは、訓の断定が難しいが「薰」「艶」「染」各二例のほか、今は「にほはす」と訓ぜられる「令丹」(158)がある。これは「丹」一字で「にほふ」と読むこともできたことを意味する。

一方、圧倒的多数の表音的表記のうち、十六例は「丹穂経・丹保布・丹穂日」でやはり二は丹で書いてある。「丹穂経」についていうと、「丹」で捉えられる色彩的な美しさが「穂」のように出現することを意味したのだと理解できる。漢字「経」は萬葉集で動詞の活用語尾「ふ」の表記に頻繁に用いられた。かくて「にほふ」は、赤く色づく、

美しい色に花が咲く、美しい色彩に輝く、などと解しうる用例が多いのである。

小野老の歌の「薫」を「にほふ」と訓ずる根拠はいくつかある。平安時代末の字書『類聚名義抄』の「薫」の訓に、カホルのほかにニホフも見えるし、萬葉集内の用例では、長歌の「つつじ花 香君の」(443)の香がニホヘル、これによく似た句「つつじ花 香をとめ」(3305)の香がニホエと訓ぜられている。後者には異伝歌があり、「つつじ花 尔太遥をとめ」(3309)と万葉仮名で書かれているからである。これらから、古くは色彩美を表わす「にほゆ」があり、「にほふ」は新しい語形らしく、それが「香」で書かれた、と解釈できるのである。それならニホフが「薫」で書けるはずである。

そもそも古代語の「かをる」は香を表現したものでないらしい。古歌集中に出ていると注記した萬葉集の長歌の一部を掲げる。

神風の 伊勢の国は 沖つ藻の なみたる波に 塩気
のみ 香乎礼流国に (162)

これは海の気がたちのぼる意らしい。神楽歌には火の気をそう表現した例もある。「かをる」はのちに香気を放つ意

に転じたようである。

小野老の歌から十四年ほどのち大伴家持の歌がある。

橘の尔保敞流香かもほととぎす鳴く夜の雨に移ろひぬ
らむ (3916)

萬葉集中の「にほふ」で確実にかおる意味で用いたのはこの一例だけと言えるのである。

以上を整理すると、「かをる」は本来何かの気が立ちのぼる意であったが、やがて嗅覚が捉える動きを表わすようになった。一方、「にほふ」は色彩的な美しさを捉える語であったが、奈良時代には嗅覚表現をも担うようになった。平安時代のいろは歌と伊勢大輔の歌ではなお視覚表現に用いられて歌語の世界の保守性を語る。意味変化は一直線に進まない。とまれ、「にほふ」の彷徨は古代から始まっていたのだ。

王朝のみやびの裏側

昨年は「源氏物語千年紀」とて、王朝の雅びをしのぶ各種の行事・展示・出版が行われた。まさか千年前の日本人すべてが風雅な生活をしていたと錯覚する人はあるまいが、とにかく凄い人気であった。それを予想してか、その賑わ

いに水をさすような本が前年に刊行されていた。歴史学者・安田政彦さんの『平安京のニオイ』（吉川弘文館2007）である。その内容が裏表紙に紹介してある。

藤原道長が栄華を誇った時代。都ではどのようなニオイがしたのか。排泄・廃棄物・動物・死など、暮らしたと切り離せないさまざまなニオイを再現。一方で、薫香の文化を芸術にまで昇華させた貴族の心性を浮き彫りにする。

平安京のニオイの実態を考えるにあたって安田さんが用いたのは史書・随筆・絵巻はもちろんだが、最も頻繁に引かれるのは今昔物語集と公家の日記である。それによって雅びの裏側を白日の下に暴きだした。日本語学徒であるわたしが関心を寄せるのは平安京の人々の暮らしそのものではない。平安時代人の嗅覚表現と表記、さらに安田さんがそれをどう表記しているかである。

初めの関心について考えるにあたって、最も多くの材料が得られる今昔物語集を覗いてみよう。用例は新日本古典文学大系本により、括弧内に巻序と話序を示し、適宜に振仮名をつける。まず芳香と悪臭を一例ずつあげる。

①光り鮮やかニ色微妙クシテ、香馥バシキ事無限シ

(15-51)

②車ノ内ノ臭キ香、彼ノ方魚ノ香ニ交レテ (10-1)

①は極楽から来迎した聖衆が持つ蓮華の描写、②は秦始皇帝の遺体の死臭を紛らわすべく異臭の強い方魚と一緒に運ぶくだりである。このように、今昔物語集では、芳香はカウバシ（馥・香）やメデタシ（微妙）などで、悪臭はクサシ（臭）で形容され、嗅覚で捉えたそれらはいずれも中立的な名詞「香」で表現される。まずそのことに注意しておこう。

安田さんがニオイと書いたものは、今昔物語集でどう書かれているだろうか。動詞・名詞あわせて全廿四例のうち、歌は片仮名書きするという方針によって「ニホフ」(27-28)としたほかは漢字「匂」である。対象の異なる三例をあげよう。

③赤ミタル顔付・眼見桜ノ花ニ匂合テ (24-31)

④人ノ香ヲ焼タル匂ヲ香テ (2-16)

⑤壺ノ内ヨリ微妙キ酒ノ香匂出タリ (19-21)

③は明らかに視覚表現であるが、この類は全体の二割ほどに過ぎず、他は④⑤のように嗅覚に関わる表現である。なお先に「香」に一括した悪臭は「匂」にはない。

今昔物語集の「にほひ／＼にほふ」は、前節で歌語に見た視覚に関わる用例は多くなく、芳香を捉える表現の方向に進んでいることが明らかである。

「かをる」の抵抗

前節では、「かをる」の意味領域を「にほふ」が侵食するさまを今昔物語集で覗きみた。だが、そこに至る過程が決して単調ではなかったことが先人の研究で明らかになっている。その経過をおもに佐藤宣男「かく（嗅ぐ）」（明治書院「講座日本語の語彙」第八巻『語誌Ⅰ』1983）などによつて書く。

古今和歌集の「にほふ」は、

春雨にはへる色も飽かなくに香さへなつかし山吹の花（春下）

のように、視覚に関わる用法でも用いられているが、過半数は嗅覚に関わる。新古今和歌集ではほぼ一対二の割合で視覚に関わる用法が多いという。歌語の意味変化は単純ではなかったようだ。

女流仮名文学では事情が違う。枕冊子では次の例のように全て視覚に関わる。

みちのくに紙の畳紙たたみがみのほそやかなるが、花かくれなるか、すこしにほひたるも、几帳のもとにちりばひたり。

（日本古典文学大系本 第三十六段）

源氏物語では視覚に関わる表現の拡大用法が認められるという。すなわち次の歌は目もとの美しさの表現であり、

御髪みくしはゆらゆらと清らにて、まみのなつかしげにほひ給へるさま（賢木）

次の歌は華やかにときめく様子を述べたものである。

さるべきにて、もとよりかくにほひ給ふ御身どもよりも（若菜下）

これらを視覚表現に含めて、嗅覚表現との割合はほぼ半々だという。同じ散文でも今昔物語集との違いは大きい。

それにしても、意味領域を侵食された「かをる」はどうなったのだろうか。

つらつき、まみのかをれるほどなど、言へばさらなり。（源氏物語・薄雲）

幼い明石の姫君の描写である。容貌の描写に慣用される表現だが、「かをる」は視覚用法を獲得しており、これは後の文献、栄華物語・狭衣物語・増鏡などにもみえる。嗅覚表現の意味領域を「にほふ」に侵食された「かをる」は、

従来「にほふ」が表現した視覚表現に進出しているのである。「かをる」もまた彷徨したのだと言えよう。

書き言葉の世界のことだろうが、このように語義が錯綜すると、誤解の生ずることが予想できる。元永元年十月二日内大臣忠通家歌合(二二〇)の三番の左の歌、

時雨には色ならぬ身の袖笠も濡るればかをる物にぞあ
りける(少将公)

をめぐって、二人の判者、源俊頼と源基俊の間で評価がわかれたのはその例である。

国字「勻」の成立

「にほふ」を書き記す決まった漢字が萬葉集にないことは先にみた。だが今昔物語集では「勻」で安定している。これは何を意味するのか、どこから来たのか。

現行の漢和字典を見ると答えは簡単で、ほとんどが「勻」を「国字」としている。国字の条件にはいくつかの段階があり、江戸時代の『倭漢三才図会』『書言字考節用集』『同文通考』も「勻」についての記述は一樣ではない。『大漢和辭典』に、「勻」は「韻」と通ずる「韻」の省画の「勻」を誤った字だとある。「勻」を国字とせず、勻の運筆

の差にすぎないとする説も行われる。

この字について、小松英雄さんの周到で緻密な論文「国字考」(『日本語書記史原論』笠間書院 1998 初出 1967)がある。昨年度わたしは大学院の授業「字訓史の研究」でこれを学生と読むことがあったが、思索の道筋を記述する小松さんの文章をここに紹介するわけにはいかない。

そこで、「ニホフ」の概念は、ある事物から漂い出るとか発散されるとかいう意味において、ヒビクに一脈かようところがある。比喩的に言うなら、ニホヒとは、耳に聞こえないヒビキである」という小松さんの結論を要約すると次のようになる。

◎「韻」は、義符(偏)「音」、音符(旁)「勻」による形声文字なのだが、国字に新鑄しえたのは、これを会意文字(全て義符による字)に見立てたからである。

◎会意文字「韻」から「音」を引き去った部分が表わすのは、(漂渺と漂う)という抽象化された概念で、それは、直感に基づく仮の見立てである。

◎国字の「勻」字は、「会意」と逆の、「削意」によって造られた文字である。

小松論文は、「匂字考」と題しながら主に「匂」を対象にして論じ、匂から匂が生まれた経過については、稿末に七行を補記するだけである。本文中に小松さんも引いている、観智院本『類聚名義抄』のこの二字の項を引こう。二行書きを一行書きに変え、アクセント表示を省く。なお、この二項のありかは六行離れてページが改まっている。

匂 聿均居匂二反 遍 ヒトシ ニホフ 是歟
カ、ル アナクル カホル ニホフ

マカル

「匂」の初めの箇所には数字分の空白がある。原本ではどうだったか知らないが、小松さんも言うように、書写した人はあとで補うつもりだったのだろう。すぐに思いうかぶ音がなかったのだ。漢和字典なのに音の記載がない。これぞ国字の特徴である。

なお、今昔物語集最古の写本で鎌倉時代の写しとされる鈴鹿本『今昔物語集』を京都大学学術出版会の複製本で見ると、虫食いの二箇所を除く四箇所すべて「匂」である。

匂いと臭い

安田政彦さんは、プロローグ「匂いと臭い」の第二・三

ページの中ほど十三行中に、「においをさまざまに表記している。修飾語を伴うものは、「生活のにおい」「生活臭」「様々な臭い」「様々なにおい」「日常的なにおい」「死の臭い」「臭い（不快なおい）」「匂い（心地よいにおい）」である。続く行には「平安貴族が臭いの環境の中で、匂いをどのように感知していたのかについても述べていく。」とある。ほかに修飾語のない「におい」があり、「香の文化」も見える。念のために書名が『平安京のニオイ』であることを確認しておく。

いかに正書法なき日本国とはいえ、かくも多様に書きわけなくてはならないニオイとは何なんだろう、と考えこまされてしまう。前節で紹介したように、小松英雄さんが「漂渺と漂う」と表現した嗅覚の対象「にほひ」は「匂」の文字を得た。嗅覚対象の総称が古代以来「香」であったことは前々節に書いた。「香」より好ましいものは「匂ひ」、さらに好ましい「香り」、そして特殊な価値をもつ漢語「香」の順に並ぶのである。香↓匂ひ↓香り↓香。数列の譬喩でいうと、正方向の語ばかりで負方向の語が缺けていない。そこに、「にほひ」の意味が下降する契機があったのではないか。

そもそも日本語には負の嗅覚対象を一括する総称名詞が
脱落していたらしい。少なくとも文献には見えない。なぜ
なのか今のわたしにはわからない。『日本国語大辞典』第
二版が、形容詞「臭し」から派生した名詞「臭み」の初出
とするのは『狂歌机の塵』(1735)である。意味論の常識
からいうと、かかるばあい、最下位にある「香」の意味が
下降して負の意味を担うようになるのだが、日本語史では
それが起こらなかったのである。

「香」は嗅覚が捉える対象の総称の位置にあつたことは
確かである。だが完全に中立というわけではなくプラスに
傾いていた。例えば萬葉集を見ると、カグ山は「香具山・
香山」のほかに「芳山」(1812)とも書かれ、松茸を詠ん
だらしい唯一の短歌の結句が「秋香乃吉者」(9233)、その
題は「詠芳」である。

しからば「香」はどこへ消えたのか。わたしは次のよう
に推論する。平安時代までの「香」は上位の「香」「香」
と語音が重なったので意味の下降に抵抗し、その代役を
「にほひ」がとめたのだと。この推論を支える理由がほ
かにもある。香は一音節語である。近代語への過程で、不
安定な一音節語はたいてい姿を変えたり消えたりした。香

も例外ではなかった。現在も方言とは言えないほどに広く
行われる「かざ」は、香が姿を変えて生き延びた語である
う。

右のように推論して成稿する直前、たまたま堀井令以知
『ことばの由来』(岩波新書 2005)を手にしたところ、す
でに一音節語の不安定と近世におけるカザの成立に言及し
ていることを知った。卑見と同じである。堀井さんは、自
身の編著『日本語語源辞典』(東京堂出版 1983)でも早く
述べていた。その両書には、上方ではにおいを嗅ぐことを
カザムということも書いてある。現行の国語辞典でカザに
言及するものは多くない。たまにあっても、「香ザス」の
語根する「大言海」の説明を踏襲するのは賛成できない。

日常生活の世界では右のような状況であつたが、藝術の
世界では状況が違い、「にほひ」は意味の下降を免れた。
和歌・能楽・連歌などの世界で、「にほひ」はその缥缈と
漂うさまを意味するゆえに却って好まれることになった。
松尾芭蕉の俳諧論で「にほひづけ」が重要視されたのは周
知のことである。

近代日本語の中におい

彷徨しつづけるニオイはその後どうなっただろうか。江戸時代については詳しい調査が済んでおらず確かなことは言えないが、少なくとも、「臭」に「におい」と附訓した字書にはまだ遭遇していない。そこで一挙に明治期まで下ってみよう。

ヘボンの『和英語林集成』再版(1872)では、「NIORニホヒ、香」の項で、五つの対訳語の最後に、初版にはなかった“effluvia”を加えている。日本語の辞書では、落合直文の『ことばの泉』(1898)に「にほふ 匂」とは別項目で「にほふ 臭。悪臭を放つ。くさくあり。」とするのが早いものではなからうか。

先年、島崎藤村の『春』を読み返すことがあり、藤村は「におい」にかなり敏感らしいと感じた。譬喩ならぬ嗅覚による表現が甘箇所ほどに見えるのである。「香」と書かれるのは、百日紅、蜜柑、酒などで、強い酒の「香」には振仮名がない。新しい果物は「香氣」で、牛肉屋の肉と脂の煮える「香氣」と晩秋の谷の「香氣」には振仮名がない。収監された囚人、屠場の煙、魚類の発するものなどは「臭気」である。登場人物の青木、牛肉スーブの「にほひ」

もある。ほかに、人間の行動を叙した「斯う遠廻しに匂はせるのは、清之介の癖である。」もみえる。この作品が書かれたのは明治四十一年(1908)。総振仮名も珍しくない時代であるが、「にほひ」がまだ「香」でも「香氣」でも書きえたのである。

その四十年後の国語政策、特に当用漢字と音訓表の理念の一つは、振仮名に頼らず日常の文字生活が営めることであつた。だが、本稿の問題に関する面ではいささか不可解な政策が採られた。「嗅」と「匂」が当用漢字に含まれていないのである。人間の五感のうち「嗅覚」だけは漢字で書くな、漢字が使いたくば「臭覚」だという。「匂」も使えないので、「くさい」にあてた「臭」による俗用の「におい」が氾濫することになった。縹渺たる気のもたらす美であつた「にほひ」の彷徨の果てが「臭」とは、なんと不幸な旅であつたことか。

もっとも、「臭」に関しては漢字の本来にも似たような事情があつたように見える。『広韻』は臭を気の摠名とする。確かに『易経』の繫辞上伝には「其の臭、蘭の如し」とあり、『礼記』内則の「皆、容臭を佩ぶ」の容臭は香袋だという。なお五行思想による「五臭」は、書物によって

小異があるが、『礼記』月令には、**糞・焦・香・醒・朽**とある。

椎名誠「活字たんけん隊」の「大ねずみとナツメヤシー
辺境の食卓・2」（岩波書店『図書』20033）に、サル
を潰して肉を食する話がある。

種類にもよるのだろうがサルを食うときは首と足の付
け根のところにあるリンパ腺のような臭い袋を傷つけ
ずに最初に取り除くのがコツのようだ。

右の傍線部はどう読んだらいいのだろう。芳香を放つニオイ
ブクロには「匂い袋」以外の表記は考えにくい。だが、
この文章中には「缶詰の中の肉や豆に缶の錫の味と臭いが
濃厚にしみ込んで」ともあるところを見ると、やはり、ニ
オイブクロでいいのかも知れない。

いま公共図書館や学校などで朗読奉仕が広がっているの
は喜ぶべきことである。近代文学はもろろんのこと、安田
政彦さんの著書の朗読を求める人があってもおかしくない。
その朗読者の苦勞を思うと、わたしはめまいがしそうな
だ。

臭い臭い

「香」の複合語で今に生きている語は少ない。わたしが
思いうかべられるのは、色香、移り香、残り香くらいのも
のだ。「臭」のほうは、過剰な清潔志向の現代、さまざま
な商品、耳慣れない語が出現する。それは音読みの臭との
複合語、加齢臭、焦げ臭、オヤジ臭、油臭、酸性臭、脂肪
臭、硫黄臭、スパイシー臭、悪臭学など、それに消臭剤に
防臭剤。そして最初の節に書いた、三千人近い臭気判定士
である。「爽臭革命」という変な名づけのサプリメントの
広告にも接した（朝日新聞朝刊 2008.11.23）。

去りし十一月十九日はボジョレヌーボーの解禁日。夕方、
多くのテレビ局のニュースで街頭の取材結果を放送してい
た。リポーターはカオリを用いたが、若い市民にはニオイ
が、年配者にはカオリが多かった。ワインの香りに因んで、
商品の陳列棚近くに芳香の発散装置を備えて売り上げを伸
ばすなどの活用方も報ぜられた。

「臭い」をどう読むか、「におい」をどう書くか。不注意
な表記は読み手を著しく困惑させる。そもそも、においの
感じ方は個人差が大きい。敏感な日本人が役所に持ちこむ
においの苦情は年に約二万件、中にはコーヒーの焙煎やパ

ン焼きのにおいもあるという(朝日新聞朝刊 2006.11.12)。
かかる「におい」を常に「臭い」と書くのはもつてのほか
である。

石川九楊『一日一書』(二玄社 2000)の十一月廿八日条
には、西郷隆盛「示子弟詩」から「沽」を取りあげている。
和様に蛇行した筆跡だが、「筆圧は高い。粘着質の運筆が
臭うような精気を放つ、いわば国書といえよう。」とある。
この「臭う」はいかなる評価と解すべきなのだろう。発酵
学者の小泉武夫さんの書き方を見ると、例えば『くさいは
うまい』(文春文庫 2006)の本文では、「におい」「臭い」
「臭み」と書き分けて明快である。

わたしの発言は、またまた高島俊男さんの発言と重なる。
その『お言葉ですが…別巻②』(連合出版 2009)の中の
「漢字の輸入は日本語にとって不幸であった」(初出 2002)
で、高島さんはワードプロセッサで文章を書いたときの
体験を語っている。ローマ字入力して変換させると、機械
は勝手に変換するが、

私の心情を機械はわかってくれない。「臭い臭い」と
書いてすぐ「くさいにおい」と読めますか? これな
どひらがなのほうがどれだけいいか。ワープロやパソ

コンを使っているうちに、注意しないと、どんどん漢
字がふえてしまう。

(二千年十二月)

前稿の訂正

前稿「ゲッキョク駐車場」(本誌二百九号)のうち、86
ページ上段九行めの「派生し」を「生じ」に訂正する。こ
れが「派生」に該当しないことは明らかで、十二月十九日、
聖心女子大学の山口佳紀さんの御指摘で気づいた。